

吾輩は猫である。名前はまだ無い。どこで生れたかとんと見当がつかぬ。何でも薄暗い
3 9

じめじめした所でニャーニャー泣いていた事だけは記憶している。吾輩はここで始めて人
8 1

間というのを見た。しかもあとで聞くとそれは書生という人間中で一番獰悪な種族であっ
1 2 3
たそうだ。この書生というのは時々我々を捕えて煮て食うという話である。しかしその当
1 6 3

時は何という考もなかったから別段恐しいとも思わなかった。ただ彼の掌に載せられてスー
2 0 5
と持ち上げられた時何だかフワフワした感じがあったばかりである。掌の上で少し落ちつ
2 4 5

いて書生の顔を見たのがいわゆる人間というものの見始であろう。この時妙なものだと思
2 8 6

た感じが今でも残っている。第一毛をもって装飾されべきはずの顔がつるつるしてまるで
3 2 7

やかんだ。その後猫にもだいぶ逢ったがこんな片輪には一度も出会わした事がない。のみ
3 6 8

ならず顔の真中があまりに突起している。そうしてその穴の中から時々ぷうぷうと煙を4
0 8

吹いた。どうもむせぼくて実に弱った。これが人間の飲む煙草というものである事はよう
4 4 9

やくこの頃知った。この書生の掌の裏でしばらくはよい心持に坐っておったが、しばらく
4 9 1

すると非常な速力で運転し始めた。書生が動くのか自分だけが動くのか分らないが無暗に
5 3 2

眼が廻る。胸が悪くなる。到底助からないと思っていると、どさりと音がして眼から火が
5 7 2

出た。それまでは記憶しているがあとは何の事やらいくら考え出そうとしても分らない。
614

ふと気が付いて見ると書生はいない。たくさんおった兄弟が一匹も見えぬ。肝心の母親
654

さえ姿を隠してしまった。その上、今までの所とは違ってむやみに明るい。眼を開いてい
695

られぬくらいだ。はてな何でも様子がおかしいと、のそのそ這い出して見ると非常に痛い。
736

吾輩は藁の上から急に笹原の中へ棄てられたのである。761

ようやくの思いで笹原を這い出すと向うに大きな池がある。吾輩は池の前に坐ってどう
800

したらよかろうと考えて見た。別にこれという分別も出ない。しばらくして泣いたら書生
842

がまた迎に来てくれるかと考え付いた。ニヤー、ニヤーと試みにやって見たが誰も来ない。
883

そのうち池の上をさらさらと風が渡って日が暮れかかる。腹が非常に減って来た。泣きた
923

くても声が出ない。931